SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

地域遺産に対する住民の認知・訪問・保全意識から見た地域運営に関する考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 宏之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/8729

■論　文

地域遺産に対する住民の認知・訪問・保全意識から見た地域運営に関する考察

A Study on Area Management from the Viewpoint of Inhabitants' Attitude toward the Local Heritage Sites

石　川　宏　之*
Hiroyuki ISHIKAWA

The primary goal of this study is to find factors that contribute to the area management of local heritages with museum activities. I discussed the relationship between the number of actual visits by inhabitants and their conservation awareness of local heritages in the following Japanese cities; Asahi, Karuizawa, Kawasaki which are located in Yamagata, Nagano, Kanagawa. The study was conducted by mailing questionnaires to inhabitants and interviewing representatives of inhabitants and citizens' groups involved in ecomuseum activities. The results indicated the following: 1) All area of inhabitants showed interest in conserving the natural heritage. 2) Awareness of conservation is influenced by the number of actual visits to local heritage sites by inhabitants. Moreover, the educational programs play a vital role in promoting conservation awareness. 3) People in their 20's in Asahi are interested in preserving industrial heritage. In Kawasaki, however, people in their 20's are more concerned with natural heritage. Therefore, it is important to include our younger generation in the conservation activities in each area.

Keywords: *Local Heritage Sites, Inhabitants, Area Management, Ecomuseum*
地域遺産，地域住民，地域運営，エコミュージアム

1．研究の背景と目的

近年、住民参加によって多様な地域遺産[(1)]を保全・活用し、環境学習の場として活かしていくことの重要性が高まっている。その試みとしてエコミュージアムは、まち全体をミュージアムに見立ててネットワーク化し、地域遺産の管理・運営に博物館活動を取り入れた運動である。今後、地域住民が地域遺産に対して保全意識を形成し、調査研究、収集保存、展示教育による博物館活動を展開することが必要であると思われる。本稿では地域遺産の管理・運営に博物館活動を取り入れることによってネットワーク化し、総合的に遺産を活かしていくことができるものと考え、これを博物館活動による地域運営と呼び、研究のテーマとする。

これまでに博物館活動や地域遺産に対する住民の意識・評価に関する既往研究として、まちかど博物館に係わる住民の参加への意識形成に及ぼす要因を捉えたもの[1)]や、農村地域における地域遺産に対する居住者の評価を捉えたもの[2)]、重要伝統的建造物群保全地区の地域遺産について住民の認知と訪問の現状を捉えたもの[3)]がある。

まち全体をミュージアムに見立てて多くの地域住民を博物館活動へ促していくことは、自分の地域に興味を抱き、地域遺産の保全に関心を持つきっかけづくりとして必要であると思われるが、今までに認知・訪問・保全意識の諸関係から地域特性を分析し、博物館活動への対応について考察したものは見られない。

*日本学術振興会・特別研究員　Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science

筆者はこれまでに地域遺産に対して住民の保全意識の形成に影響を及ぼす要因を捉えてきたが[4)・5)]、本研究では地域遺産に対する住民の認知・訪問・保全意識との関係から各地域の課題を捉え、地域遺産を管理・運営するための手がかりを得ることを目的とする。

2．研究方法と調査概要

（1） 考察の方法

考察の手順としては、まず各地域の地域遺産について知っている人の数（以下、認知者数とする）と実際そこに訪問したことのある人の数（以下、訪問者数とする）、保全意識を持つ人の数（以下、保全意識者数とする）との諸関係から地域特有の遺産とその性質を把握する。次に地域遺産に対する住民の保全意識を属性別に分析し、地域の課題を明らかにしていきたい。

（2） 調査対象地の概要

調査対象地は、山形県朝日町と長野県軽井沢町、神奈川県川崎市である。選定理由としてこれらの地域ではいずれも遺産を管理・運営する上で地域住民が主体となってエコミュージアムを用いているからである。その内容や方法は、生涯学習により楽しく生き生きと暮らせる生活スタイルを推進している朝日町、青年会議所により地域遺産の保全活動を展開している軽井沢町、多摩川をテーマとし市民活動によって推進されている川崎市、と様々な取り組み方をしている。今回においては現実的に構想が進められている行政域内の住民を対象として調査を行なった。概況を表1に示す[(2)]。

（3） 調査の手法

調査の手法としては、各地で地元住民を交えて45箇所の地域遺産の選定作業[(3)]を実施し、これらの遺産に対する住民の認知・訪問の実態と保全意識との関係を捉えるために郵送によるアンケートを行なった。アンケート票の設問は主に以下の3項目である。①回答者のプロフィール：基礎的属性（性・年齢・居住年数[(4)]）と日常生活の関

表1　調査対象地の概況

	朝日町	軽井沢町	川崎市
プロジェクト名	楽しい生活環境観エコミュージアムのまち	軽井沢エコミュージアム構想	多摩川エコミュージアム構想
a. 人口（人）	9,819	15,918	1,202,820
b. 面積（km²）	196.73	156.05	142.38
c. 人口密度（1km²当たり）	49.9	98.3	8448.0
d. 人口増減率（△は減少）	△5.7	△0.8	2.5
e. 高齢者率	65.0	23.8	15.1
f. 一次産業就業者率	32.8	0.05	0.01

註）a.b.国勢調査1995年　c.(a)/(b)　d.国勢調査1995年/1990年（%）e.国勢調査1995年の60歳以上の人口比（%）　f.国勢調査1995年の一次産業人口比率（%）

表2　アンケートの配付数と回収結果

地域	地区	総人口	%	成人人口	%	配付数	回収数	%	回収率
朝日町	北部			1,942	25	198	67	25	33%
	中部			3,802	49	365	123	48	34%
	西部			2,045	26	217	71	27	32%
	全体			7,789	*100	780	261	100	34%
軽井沢町	東部	3,491	22			211	61	33	29%
	南部	3,581	22			469	85	46	18%
	中部	5,122	32						
	西部	3,724	23			100	39	21	39%
	全体	15,918	**100			780	185	100	24%
川崎市	川崎区			159,832	16	144	23	11	16%
	幸区			110,084	11	101	16	7	16%
	中原区			160,537	16	146	30	14	21%
	高津区			143,240	14	130	27	13	21%
	宮前区			153,625	15	141	45	21	32%
	多摩区			155,114	16	138	40	19	29%
	麻生区			108,864	11	100	34	16	34%
	全体			991,296	*100	900	215	100	24%

＊1998年11月住民基本台帳，＊＊1995年10月住民基本台帳

表3　回答者の基礎的属性

		朝日町				軽井沢町				川崎市			
アイテム	カテゴリー	20歳以上の人口	%	回収数	%	20歳以上の人口	%	回収数	%	20歳以上の人口	%	回収数	%
性別	男性	3,810	49	115	44	5,743	48	70	38	519,167	52	98	46
	女性	3,979	51	145	56	6,147	52	112	61	472,129	48	114	53
年齢	20～29歳	806	10	11	4	2,012	17	23	12	241,268	24	24	11
	30～39歳	929	12	37	14	1,900	16	34	18	210,275	21	54	25
	40～49歳	1,394	18	51	20	2,316	19	29	16	167,839	17	43	20
	50～59歳	1,143	15	44	17	2,011	17	39	21	164,660	17	47	22
	60歳以上	3,517	45	117	45	3,651	31	57	31	206,315	21	43	20
居住年数	3年未満	—		11	4	—		14	8			45	21
	3年～10年未満	—		14	5	—		41	22			42	20
	10年～20年未満	—		30	11	—		29	16	—		40	19
	20年以上	—		206	79	—		92	52			86	40

心事を記してもらった。②地域遺産に対する住民の認知と訪問経験：45箇所の地域遺産について「訪れたことがある」と「知っているが訪れたことがない」を記してもらった。③保全したい遺産と理由：45箇所の地域遺産の中から保全したいものを３つまで選び、理由について７項目[5]の中からいくつでもあげてもらった。なおアンケート調査の対象者は、住民基本台帳に基づき無作為抽出した成人である。また、補足調査としてエコミュージアム構想に携わっている住民に対しその地域や地域遺産の特徴について聴き取り調査を行なった。1995年10月と1998年11月～12月にアンケート票を郵送し、1999年９月～10月に地元住民に対する聴き取り調査を行なった。調査の概要を表２と３に示す。ただし全体的に回収率が低く、回答した人としなかった人との保全意識について差があることも予想されるので、そのことを前提条件として考察を行なう[6]。

３．認知者数・訪問者数・保全意識者数との関係

はじめに、各々の地域遺産に対する認知者数・訪問者数・保全意識者数との関係を明らかにし、保全意識の高い[7]遺産の性質を探る。

（１）　認知者数と訪問者数との関係

図１は地域遺産に対する住民の認知者数と訪問者数との関係について、仮に地域遺産を３つの種類に分け「▲文化系」・「◆産業系」・「○自然系」別に示したものである。その中で認知者数・訪問者数ともに多いものに朝日町の「○大沼の浮島」や軽井沢町の「○白糸の滝」、川崎市の「○等々

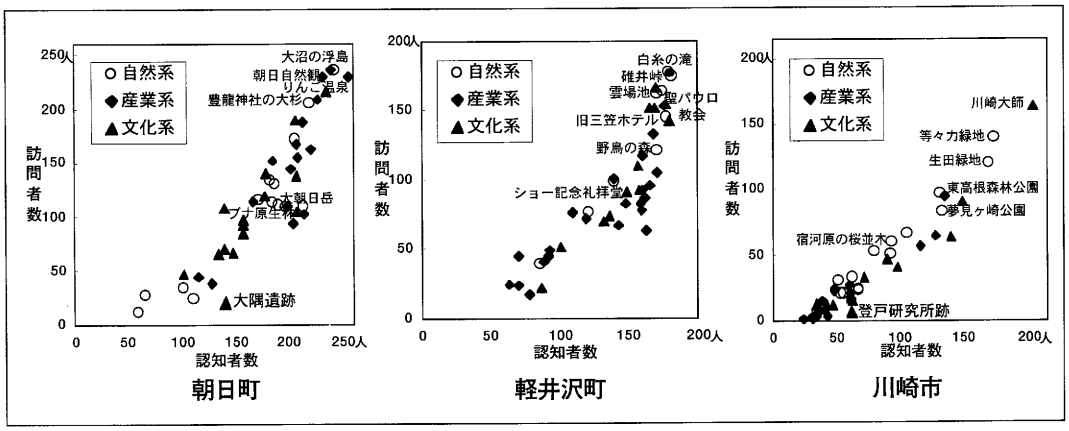

図１　３地域住民の認知と訪問

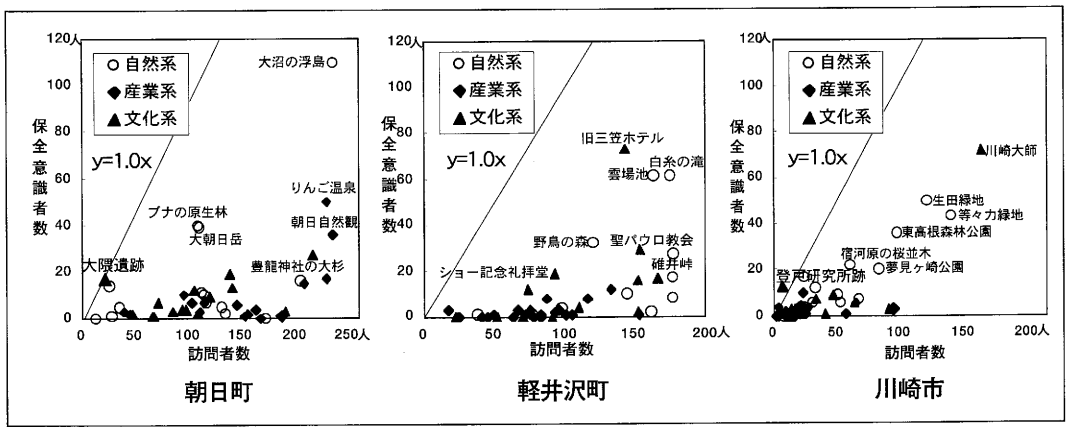

図２　３地域住民の訪問と保全意識

力緑地」などをはじめ自然系遺産がどの地域でも多く見られる。他地域と比べ軽井沢町の自然系遺産は、全体的に認知者数・訪問者数とも多い。

また訪問者数は少ないが、認知者数が多い特有な分布の遺産として朝日町の「▲大隈遺跡」[8]と川崎市の「▲登戸研究所跡」[9]の文化系遺産が見られた。これらの認知者数と保全意識者数が多い理由としては、「▲大隈遺跡」をテーマとしたシンポジウムが調査に先立つ1996年11月に開催され、新聞や小学3年生の副読本などにも取り上げられたことと、「▲登戸研究所跡」についてはマスメディアなどでとりあげられたことから地域住民への周知がなされたものと思われる。

（2） 訪問者数と保全意識者数との関係

図2は、訪問者数と保全意識者数との関係を示したものである。保全意識者数について見ると、どの地域も自然系遺産に多いが、他に朝日町では産業系遺産、軽井沢町と川崎市では文化系遺産の中に多いものがある。そして自然系遺産と文化系遺産について全般的に訪問者数が多いものは、保全意識者数も多い。ただし、訪問者数と保全意識者数との関係を見ると、「▲大隈遺跡」と「▲登戸研究所跡」は図の左端に位置し、訪問したことはな

図3　地域遺産の保全理由（複数回答）

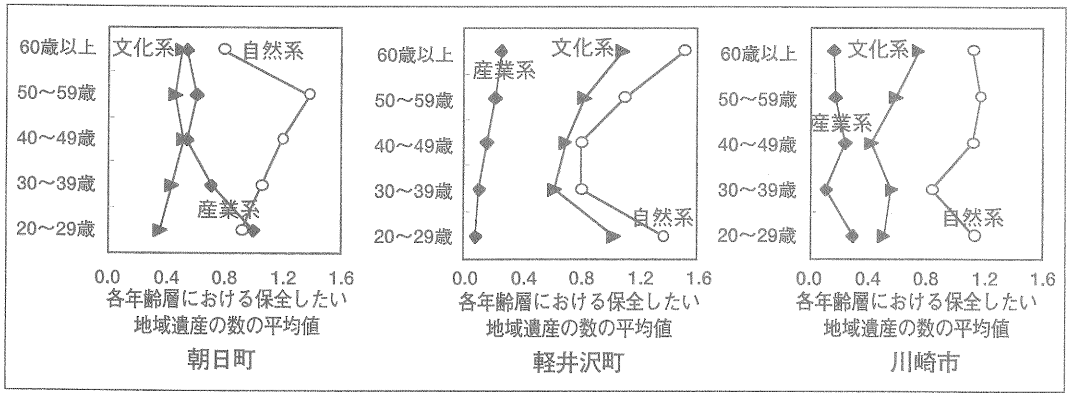

図4　3地域住民の保全意識

いが保全意識を持つ人のいることを示しており、多くの人々にその価値が認められているものである。これらは、前述のように訪問者数は少ないが、情報や教育により多くの住民に認知されている遺産である。

以上のことから中には訪問によらず情報や教育により形成されるものもあるが、一般的に地域住民の保全意識は、訪問経験に影響される傾向にある。

（3） 地域遺産の保全理由

図3は地域遺産を3つの種類に分け、保全意識者数の多いものから順に並べ、選んだ理由の内訳を示したものである。自然系遺産の保全理由について見ると全般に「住民に広く親しまれている」や「地域の景観や雰囲気を醸し出している」の占める割合が大きい。また文化系遺産を見ると全体的に「歴史的価値がある」の割合が大きいが、「▲川崎大師」については「住民に広く親しまれている」の割合も大きい。

これらのことから地域遺産に対する住民の保全意識を高めていくには、「住民に広く親しまれている」の価値観を一般の地域遺産の中に見い出すことが必要であると思われる。

（4） 保全意識者の年齢別の特性

図4は「▲文化系」・「◆産業系」・「○自然系」の地域遺産に対して年齢別に保全意識者数の割合を見たものである。どの地域も「○自然系」が最も高く、年齢が高くなるにつれてその値も高くなる傾向にある。しかし、「○自然系」を見ると軽井沢町や川崎市では特に20代の値が高いが、朝日町ではそうではなく代わりに「◆産業系」の値が高い。表4から朝日町の20代の関心ごとを見てみると「趣味・娯楽」が最も多く次に「仕事」で、川崎市の20代では「趣味・娯楽」の次に「健康」「スポーツ・レジャー」「友人」の3つが多い。これらのことから「○自然系」に対して川崎市における20代の保全意識の高さは、「健康」から自然環境に対する意識の高まりと「スポーツ・レジャー」を通じて自然に親んでいることによるものと思われる。また、「◆産業系」に対して朝日町の20代の高さは、中山間地域である朝日町の課題として地場産業の活性化と若年層の「仕事」への関心の高さとの関係に見られるものと思われる。なお、性別・居住年数と保全したい遺産の種類との関係は特に見られなかった。

4．まとめ

地域遺産に対する住民の認知・訪問・保全意識との関係から3地域の特性について以下の点が指摘できた。

（1） 地域特性に応じた保全計画の策定

地域遺産を種類別に分けて3地域の特性を見てみると、自然系遺産についてはどの地域住民も認知者数・訪問者数・保全意識者数ともに多かった。さらに保全意識者数について見てみると朝日町では産業系遺産、軽井沢町と川崎市では文化系

表4　地域住民の関心ごと（複数 回答）

朝日町

	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上	合計
趣味・娯楽	7 (64)	14 (38)	12 (24)	16 (36)	37 (32)	86 (33)
仕事	4 (36)	14 (38)	28 (55)	18 (41)	30 (26)	94 (36)
健康	3 (27)	19 (51)	38 (75)	35 (80)	92 (79)	187 (72)
こども	3 (27)	23 (62)	32 (63)	18 (41)	25 (21)	101 (39)
友人・知人	3 (27)	9 (24)	4 (8)	4 (9)	24 (21)	44 (17)
スポーツ・レジャー	3 (27)	12 (32)	11 (22)	3 (7)	10 (9)	39 (15)
金・財産	3 (27)	8 (22)	9 (18)	6 (14)	13 (11)	39 (15)
家族	2 (18)	18 (49)	27 (53)	17 (39)	55 (47)	119 (46)
地域活動	1 (9)	6 (16)	6 (12)	9 (20)	22 (19)	44 (17)
住宅・土地	1 (9)	8 (22)	15 (29)	7 (16)	14 (12)	45 (17)
回答者総数	11 (100)	37 (100)	51 (100)	44 (100)	117 (100)	261 (100)

川崎市

	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上	合計
趣味・娯楽	18 (75)	26 (48)	18 (42)	28 (60)	20 (47)	110 (52)
健康	13 (54)	37 (69)	32 (74)	37 (79)	35 (81)	154 (73)
スポーツ・レジャー	13 (54)	23 (43)	9 (21)	15 (32)	10 (23)	70 (33)
友人・知人	13 (54)	14 (26)	6 (14)	12 (26)	13 (30)	58 (27)
仕事	11 (46)	30 (56)	20 (47)	19 (40)	6 (14)	86 (41)
家族	10 (42)	32 (59)	25 (58)	33 (70)	27 (63)	127 (61)
金・財産	9 (38)	24 (44)	13 (30)	11 (23)	9 (21)	66 (32)
こども	6 (25)	33 (61)	25 (58)	15 (32)	10 (23)	89 (42)
住宅・土地	5 (21)	25 (46)	13 (30)	11 (23)	9 (21)	63 (30)
地域活動	0 (0)	3 (6)	1 (2)	9 (19)	5 (12)	18 (8)
回答者総数	24 (100)	54 (100)	43 (100)	47 (100)	43 (100)	215 (100)

数字は人数（人）、括弧内は年齢別の回答者総数に対する割合（%）

遺産の中に多いものもあり、地域特性が表れた。

このことから地域特性に応じて保全意識者の多い遺産から優先的に保全計画を策定していくことが考えられる。例えば、山形県朝日町では全般的に自然系遺産に対し保全意識者が多いが、産業系遺産についても保全意識者が多いことから地場産業であるりんご栽培やワインづくりについて活用することも考えられる。

（2） 地域遺産に関する教育プログラムの実施

自然系遺産と文化系遺産について全般的に訪問者数が多いものは保全意識者数も多いことから、保全意識は地域遺産を訪れることで芽生えると思われる、ただし、朝日町と川崎市では訪問によらず情報や教育により保全意識が持たれる地域固有の遺産もあることから保全意識の低い遺産の対応については地域住民に広く親しまれるような教育プログラムを実施するなどの対応も考えられる。例えば、史跡巡りなどを催し多くの人々に足を運んでもらうことや、その遺産の価値を多くの人々に知ってもらえるような講演会やシンポジウムなどを開くことも大切であろう。

（3） 若年層の意識を取り込むこと

3地域における保全したい地域遺産の数の平均値から各年齢層の保全意識を比べると朝日町民の20代は産業系遺産に、軽井沢町民と川崎市民の20代は自然系遺産について高かった。このような地域差は、若者の関心事の違いにより影響される。

ゆえに若年層の保全意識に地域特性が表れていることから、若年層の意識を取り込んだ地域遺産の保全活動を推進していくことが大切であると思われる。例えば、川崎市の20代では自然系遺産に対し保全意識が高いので緑地公園で自然観察会などを催し、参加を促すことも考えられる。

今回は地域遺産に対する住民の認知・訪問・保全意識との諸関係から3地域の特性を捉え、博物館活動を展開するための知見を得た。今後は住民主体によるエコミュージアムを用いた実践的な博物館活動について研究を深めていく予定である。

謝辞 本研究を進めるにあたり横浜国立大学の小滝一正教授並びに大原一興助教授にご指導を頂いた。また本調査を行なうにあたりエコミュージアム構想を推進している関係者の方々にご助力を仰いだ。ここに記して感謝の意を表したい。なお本研究の一部は、日本科学協会の平成10・11年度笹川科学研究助成の補助を受けて実施されたものである。

補註

（1） 本稿では地域の動植物財が生息している生態を自然系、人々が培ってきた社会生活に関わる動的・不動的財や無形財を文化系、特にその中で産業界の発展の証拠となる動的・不動的財を産業系とし、以下それらを総称して地域遺産と記す。

（2） 朝日町は、山形県のほぼ中央部に位置し、磐梯朝日地区の主峰大朝日岳の東部山麓地域に開けた中山間地域である。町を流れる最上川の両岸に広がる河岸段丘は、水田・りんご・葡萄などの農作物の栽培に適した肥沃な土地で覆われている。エコミュージアム構想は、1991年に策定された朝日町第3次総合開発基本構想・基本計画から「楽しい生活環境観」の具現化として自治体と町民組織により推進されている。これまで国際会議やガイドボランティアの養成講座などを行なっている。

軽井沢町は、長野県東端に位置し、浅間山山麓に広がる高原に開かれた地域である。避暑地として多くの人々に知られ、年間約750万人の観光客がスポーツや美術館めぐり、自然観察など様々な目的をもって訪れている。軽井沢エコミュージアム構想は、1994年に「全国青年会議所リゾートサミット」の中で町の歴史や文化を考慮しながら将来につなげ、住み良い、誇りのある郷土づくりをめざすために軽井沢青年会議所によって策定され町民団体により進められている。

川崎市は、神奈川県北東部に位置し、多摩川に沿った細長い地域である。南東部の臨海地区には石油化学コンビナートなどの工場が立ち並び、北西部には多摩丘陵に山林が残っ

ている。川崎市制70周年記念事業「地球市民会議」における「水と緑の分科会」で「市民・企業市民・専門家・行政のパートナーシップによる多摩川水系の自然環境と歴史・文化遺産の保全を進めよう」と提言され、これを契機として1996年多摩川エコミュージアム構想が市により策定された。構想実現に向けて市民主体の7つのプロジェクトチームが活動を行なっている。

（3）　選定作業の手順として、はじめに地域に点在する遺産を文献[6)7)8)]などから集め、分類・整理し、リストを作成した。次に市町内の活動団体とワークショップを行ない、あげられたものの中で集計して多いものから順に45箇所の地域遺産を選定した。また特定の地区や遺産のカテゴリーが偏らないようにするために、後日、住民団体を交えて45箇所の地域遺産について再検討をしてもらった。なお、訪問する動機について尋ねたところ憩いの場所であることや、みんなと交流できるからとの意見が聴かれた。

（4）　朝日町民と川崎市民に対しては「関心ごと」を調査項目に付け加えた。

（5）　朝日町民と川崎市民に対しては「保全理由」を調査項目に付け加え、「川崎のエコミュージアムの胎動」[6)]を参考に7項目にした。

（6）　調査対象者は、市町内に在住する成人を住民基本台帳に基づき無作為抽出した。配布数は有効回収数約200を目論見、軽井沢町民の総人口の約5％、朝日町民の成人人口の約10％、川崎市民の成人人口の約0.1％とした。表3は回答者の概要を属性別に示したものであるが、回収数に関して性別をみると若干多く女性を回収しており、年齢については20歳代の回収数が少ない。また、回答者の居住年数をみると20年以上の占める割合が朝日町＞軽井沢町＞川崎市の順に小さくなる。

（7）　各地域の遺産について「守り・伝え・広めていきたいもの」の回答者数の多いものほど「保全意識が高い」とした。

（8）　大隈遺跡は、土器を伴わない粗雑な打製石器が発見された所である。

（9）　登戸研究所跡は、大平洋戦争時にそこで化学兵器の開発が行われた所である。

参考・引用文献

1）近藤隆二郎・盛岡通「ミニ博物館事業における「館長」意識の形成過程に関する研究 - 墨田区「小さな博物館」と伊勢市「まちかど博物館」、1994年度第29回日本都市計画学会学術研究論文集、1994, pp.703-708.

2）藍澤宏・他3名「一般集落と推奨集落との相違からみた地域資源による集落誘導　農村地域における地域資源からみた集落誘導に関する研究その2」日本建築学会計画系論文集、第507号, 1998. 5 , pp.143-149.

3）久保田百年・野村東太・大原一興「地域環境構成要素に対する住民の訪問・認知特性に関する考察―愛媛県内子町における調査・研究―」日本建築学会学術講演梗概集E、1993. 9,　pp.1255-1256.

4）石川宏之・大原一興・小滝一正「地域資源に対する川崎市民の保全意識の形成に関する調査研究」、日本建築学会技術報告集、第10号, 2000. 6, pp.203-208.

5）石川宏之「地域遺産に対する朝日町の保全意識の形成条件に関する調査研究」、日本ミュージアム・マネージメント学会年報1999・2000年度合併号、2002.

6）川崎市市民局「川崎のエコミュージアムの胎動」「クオータリーかわさき」、No. 42, 1996. 2.

7）朝日町エコミュージアム研究機構『楽しい生活環境観・エコミュージアムのまち案内プログラム』、朝日町、1997.

8）軽井沢青年会議所『人に優しい、誇りある郷土を見つめて―軽井沢エコミュージアム構想―』、1996.